

パネル・ディスカッション 「国際的に活躍できる会計人材をめざして」

本シンポジウムのパネル・ディスカッションは、「国際組織でどう活躍し、キャリア形成に活かすか」と「求められる国際会計人材像」の2部構成により行われた。以下は、その概要である。

第1部

「国際組織でどう活躍し、キャリア形成に活かすか」

第1部では、木内仁志氏（PwC あらた有限責任監査法人 執行役副代表）をモデレーター兼パネリスト、柏木茂雄氏（慶應義塾大学 特別招聘教授）、河合江理子氏（京都大学大学院 総合生存学館 教授）、坂口和宏氏（富士通(株) 財務経理本部 経理部 財務企画部 マネージャー）、関口智和氏（有限責任 あずさ監査法人 パートナー）をパネリストとしてお招きし、パネル・ディスカッションが行われた。

1. 国際組織での経験、問題意識

冒頭で、モデレーターの木内氏より、国際組織での活躍は日本人共通の課題である旨が述べられ、国際組織で活躍してきた各パネリストに、自己紹介とともに国際組織における経験及びこれを踏まえた問題意識についてご説明いただきたい旨が述べられた。

まず、柏木氏より、国際通貨基金（IMF）及びアジア開発銀行（ADB）に職員及び日本代表理事として財務省より計12年間出向した経

験及び現在、国際人材創出センターで活動を行っている旨が説明された。また、国際機関においては、異なる国籍・母国語の人材が集まる中で、共通言語としての英語、共通ツールとしての経済学を身につけ、共通の使命感を持って業務を行っていた旨、世界中の優秀な人材と対等に働ける楽しさがある旨が述べられた。さらに、国際人材に求められる資質として、専門性、自分の考え方をわかりやすく伝えるというコミュニケーション能力、多様性を許容し楽しむ姿勢、常に自分の考えを持つことが重要である旨が述べられた。

次に、河合氏より、マッキンゼーや国際決済銀行（BIS）及び経済協力開発機構（OECD）の年金運用等、20年以上国際組織で働いてきた経験が紹介された。また、グローバル人材として活躍するためには、専門性、コミュニケーション能力、異文化を理解することが挙げられ、また、日本と海外では必要とされるマネジメント能力が異なっている点を理解すること、国際会議においては必ず意見を述べるが大切である旨等が述べられた。

次に、木内氏より、監査法人における米国事務所への赴任、IFRS部門のリーダー等の経験が説明された後、英語のスピーキング・リスニング、ディベート力等のスキルアップが必要なことに加え、会議における仲間作りが重要である旨が述べられた。

次に、坂口氏より、富士通(株)における米国

子会社への駐在、日本の財務諸表作成者としては初の国際会計基準審議会（IASB）におけるスタッフとしての経験が説明された後、IFRSについてはその本質を理解して使うことが重要であること、ビジネスの多様性と会計処理のばらつきを混同しないこと、IFRSに対する日本の関与を深めることが重要であること等が述べられた。

最後に、関口氏より、監査法人における海外駐在、金融庁における証券監督者国際機構（IOSCO）や国際監査・保証基準審議会（IAASB）関連の会議等への参加、IAASBのボードメンバー、企業会計基準委員会（ASBJ）の常勤委員としての国際会議への参加等の経験が説明された。その後、国際的な規制や基準の開発に有意義な貢献するためには実務の知識・経験が重要である旨、また、自ら草案のドラフティングを行う等の地道な貢献をすることによりリーダーになっていけるのではないかという感想等についても述べられ、国際会議・国際組織への参画というチャンスにぜひチャレンジして欲しい旨が述べられた。

2. 自己変革と国際会議で活躍するためのヒント

次に、モデレーターの木内氏より、ここまでのプレゼンテーションにより、国際的な組織で活躍するためには、英語力はもちろん重要であるが、多様性の許容、自分の意見を持つこと等、過去の経験を乗り越えて自分の殻を破ることが重要であると感じたが、自分を変えるためにはどのようにすべきかとの質問がなされた。

柏木氏からは、これまで自分が快適と思っていた環境に留まらず、積極的に外に出てチャンスを探む気概を持ち、そして多様性を楽しむ気持ちを持つことが必要だと述べられた。河合氏からは、一緒に働く人からのフィードバックを受け、自分を客観視することが良い旨が述べられた。坂口氏からは、多様な価値観を楽しみ受け入れることにより自らの幅を広げることが良いとの発言がなされた。

続いて木内氏より、国際会議において日本人として存在感を出すためのヒントを教えていただきたい旨の質問がなされた。

柏木氏より、国際会議においては、自分の意見を論理的に簡潔にそして説得力を持って述べるのが重要であり、結論を先に述べた後に理



モデレーター兼パネリスト（木内仁志氏）



パネリスト（左から、柏木茂雄氏、河合江理子氏、坂口和宏氏、関口智和氏）

由を述べる方法が大切であること、他の人の意見に耳を傾け、共感できる場合はそれを明確に表すことで仲間を作ることが大切であること、また、流れに沿った意見を言うことで存在感が発揮できる旨が述べられた。

関口氏からは、3つの「きょう」、議論の内容に興味を持つこと、発言する際に度胸を持つこと、そして、最後に愛嬌が大切ではないかという見解が述べられた。

第2部

「求められる国際会計人材像」

第2部では、平松一夫氏（関西学院大学 名誉教授）をモデレーター、井口譲二氏（ニッセイアセットマネジメント(株) チーフ・コーポレート・ガバナンス・オフィサー 株式運用部 担当部長（投資調査室））、石原秀威氏（新日鐵住金(株) 執行役員 財務部長）、岩崎伸哉氏（有限責任監査法人トーマツ パートナー IFRS 室長）、田邊朋子氏（新日本有限責任監査法人 IFRS デスク パートナー）、谷口岩昭氏（(株) リクルートホールディングス 執行役員 財務・経理・税務担当）、辻野菜摘氏（JP モルガン証券(株) 株式調査部 マネジング ディレクター）をパネリストとしてお招きし、パネル・ディスカッションが行われた。

1. 求められる国際会計人材像について

まず、各パネリストより、求められる国際会計人材像について意見が述べられた。

井口氏より、財務会計基準機構（FASB）の国際会計人材支援プログラムに参加し、利用者として会計基準について意見を述べる重要性を認識した旨が述べられた後、国際会議等におけるネットワーク構築においては、プリンシプルを持ち、組織・活動に貢献することが重要である旨、自国の状況を理解した上でグローバルな

舞台で発言することが重要である旨、また、非公式な場におけるコミュニケーションが公式の会議に生きてくる旨が述べられた。

次に、石原氏より、産業界サイドにとって求められる国際会計人材像は、財務諸表を作成できることやIFRSをよく知っていることよりも、意見をしっかりと持って国際的に発信できることが重要である旨が述べられた。また、企業会計は企業行動や経営の規律に大きな影響を与えるものであること、例えば、のれんの償却や当期純利益の有用性について日本から意見発信を行うことで、IFRSの高品質化に日本が参画・貢献することが重要である旨が述べられた。

次に、岩崎氏より、求められる国際会計人材像とは、所属している組織において認められたプロフェッショナルな能力・知見に加え、プラスアルファがある人材、より高度な能力、広い知見、ビジョンや構想、公益への情熱・志を持っている人物ではないかとの意見が述べられた。本日の参加者は、所属している組織において既に国際会計人材と目されているはずであり、今後は、本日のような機会も活用し組織外との交流経験を積み、社会から求められる人材に成長していくことを考えてほしい旨が述べられた。

次に、田邊氏より、ロンドンにあるIFRSサービス部門に日本人第1号として出向した経験を踏まえて、会計力、異文化への適応力、コミュニケーション力の3つが重要である旨が述べられた。会計力は当然に重要なスキルであり、高度な知識・分析力の他、実務面への配慮が欠かせない旨が述べられた。異文化への適応力、コミュニケーション力については、他人の考えを受け入れることの大切さ、日本人としての常識が世界の常識として必ずしも受け入れられるものではないこと、また、一貫した価値判断基準を持つことや要点を明確にして伝えるこ

とが必要である旨が述べられた。これらを踏まえて、さまざまな価値観を1つの目標に向かってまとめあげ、新たなイノベーションを生み出していける人材が求められる国際会計人材像である旨が述べられた。

次に、谷口氏より、M&Aを通じた日本企業のグローバル化をファイナンス面からサポートするという自らのキャリアミッションの中で、文化・慣習が異なる現地のスタッフとの間に信頼関係を構築しながら、密接かつ明快なコミュニケーションを行うことが重要であることを痛感した旨、また、グローバル化が進展する中において、多様性の確保が会計・経理業務においても有効となる旨が述べられた。加えて、このようなグローバル化時代において必要なスキルはコミュニケーション力とストレス耐性であり、コミュニケーション力としてはシンプルかつ論理的な説明能力がより求められる旨、ストレス耐性としては時間的なプレッシャーや時差・距離といった物理的制約に耐えられること等が述べられた。

最後に、辻野氏より、金融セクターの株式アナリストとしての経験が述べられた後、投資家は常に国際的な比較を望んでいるため、日本の財務会計に限らず IFRS・米国会計基準や海外

における株式分析手法、例えば保険であればソルベンシー規制の関係等、さまざまな分野をフォローしていく必要がある旨が述べられた。また、IASBの保険会計のアウトリーチへの参加がきっかけとなり、IASBから意見を求められるようになった経験が述べられ、利用者であるアナリストからも意見を発信していくことが重要である旨が述べられた。

2. 国際会計人材の育成にあたって国際と会計のどちらに力点を置くのか

続いて、モデレーターの平松氏から、各パネリストに対して、国際会計人材の育成にあたっては国際の側面と会計の側面のどちらに力点を置くべきか及び国際会計人材の育成上のポイントについて質問がなされた。

まず、井口氏より、グローバルな投資家は、各地域における実務に根差した専門知識を有しており、その観点では、会計の専門知識が大事であるが、それだけでは足りず、インターナショナルな知見が必要である旨が述べられた。

次に、石原氏より、会計は当然必要な知識ではあるが、より重要なのはグローバルなビジネスの視点、経験であり、例えば、実際に海外の事業会社で財務の立場からビジネスに関わるよ



モデレーター（平松一夫氏）



パネリスト（左から、井口謙二氏、石原秀威氏、岩崎伸哉氏、田邊朋子氏、谷口岩昭氏、辻野菜摘氏）

うなことが有効である旨が述べられた。

次に、岩崎氏より、国際会計人材としては国際的な側面と会計的な側面は両方ともに必須であり、一方の能力の向上が他方にも好影響を与える効果がある旨が述べられた。ただし、こうした人材となるための動機付けとしては、必ずしも両者がバランスされている必要はなく、例えば国際的な環境を経験することなどが先行してもよい旨が述べられた。

次に、田邊氏より、監査法人においては会計力を育てる方法は一定程度完成されていると考えられるが、一方で国際力を身につけるには本人が試行錯誤、若しくはもがき苦しみながら得た知識・経験が大切であるとの発言がなされた。

次に、谷口氏より、国際会計人材の育成にあたっては国際の側面と会計の側面はどちらも重要であり、また、学部・大学院の段階から会計教育の一部を英語で行うことが今後の国際会計人材の育成に資するのではないかとの発言がなされた。

次に、辻野氏より、自助努力が非常に重要であり、通常業務の隙間の時間でいかに学ぶかということがポイントとなるが、アナリストは海外投資家からの質問対応をする中で自分が補完しないといけない知識が明確となり、そしてそれを発信していくという良いサイクルを確立することが大切である旨が述べられた。

最後に、モデレーターの平松氏より、日本の場合、学問水準が高いため、日本語で学べるが、発展途上国、新興国であれば自国語の専門書がないため、英語で学ぶことになり、グローバル化では有利に働いている旨が述べられた。いずれにせよ、求められる国際会計人材像としては、会計力はもちろん重要であるが、国際性を身につけた人材の育成が重要である旨が述べられた。